

一笑懸命な私の、 一生懸命な就職活動

文&写真 落語研究会 古山樹里(経済学部4年)



ある落語会。噺の幕開けのマクラで「わたくし4年生でして、実はもう内定が…ないんですよー!」とやったら、お客さまに大笑いされた。全然笑いごとではない。その次に「でも実はまだ一つだけ就職先があるんですよ!それが…入門なんですよー!!!」。またしても大笑いだった。もう、泣きたい気分になった。

就職活動がままならないのは1年次から続けてきた中央大学落語研究会(落研)と関係がある。3年生にとって12月1日は就活解禁日。友人たちが就活準備を一生懸命に進める中、私は一生懸命に落語会の準備を進めていた。パルテノン多摩・小ホールを会場とする落研の大きなイベント「第102回中大落語会」(12月11日)が終わった12月下旬から、ようやく就活を始めた。

3年生で中大落研の部長を務めて以来、我ながら多忙な日々を送った。昼休みは和室で練習会、放課後は落語の披露やイベント準備などに追われ、午後11時の閉門まで残った。サークルの用事が増えれば増えるほど、落とす単位の数も増えていった。<もちろん4年生で取り返しました(笑)>

就活の最初はマスコミ志望。これには落研の活動が影響している。一つのものをお客さまにお見せするには、相当な労力と時間がかかる。それでも終わった後の達成感は並々ではなかった。

人を笑顔にする仕事がしたいと思い、マスコミ業界を選択したが、もともと競争倍率の高い業界である。落語にかまけていた私の付け焼刃では役に立たず、あっけなく轟沈した。

翌年…5月になっても内定はゼロ。なんだか全てどうでもよくなって、がむしゃらに友だちと遊んでいた。落研部長を引退したにも関わらず、老人会などのサークル活動に頻繁に顔を出し、自虐ネタで笑いを取った。

このまま落語にうつつと抜かしてはいけないと思い、「夏採用」に向けて就活を再開した。いろいろと業界を見ていくうちに生命保険に興味を持った。

実は私には高校のころからの夢があり、それが「丸の内のOLになること」だった。岡山出身の田舎者の私には、なぜか「丸の内」という地名がとてまかっこよく思え、そこで働くことが目標だった。

生命保険会社の説明会。単純な私は、綺麗なお姉さんが都心でバリバリ働いている姿を見て、一瞬で「コレだ」と決めた。

生命保険会社にも多様な職種がある。保険を販売する営業職、介護や医療など時代が求める保険を企画し営業を統括する総合職の2つがある。

調べていくうちに落研での日々を思い出した。年2回、大きな落語会を主催する。落語会前の10日間ほどは、多摩キャンパスのペDESTリアンデッキ(遊歩道)下でビラを配り、チケットを買ってくれる人を募るのが、なかなか売れない。1枚100円でも売れない。

それでも根気よく泥臭くチケットを売るのが私のサークルだった。成果は10人に1人くらい。ときには学部事務室まで押しかけて、事務職員と仲良くなって買ってもらうこともあった。この泥臭くて地道な日々が、実は私は嫌いではなかった。

部長ともなれば、演者として舞台に立つのはもちろん、舞台作りや演者の人選、出し物を決めるなど裏方の仕事をたくさん行う。嫌になることばかりだったが、高座名『あたり家駄B』で一席うかがう中大落語会で、お客さまの笑った顔を見ると苦勞はすぐに吹き飛んだ。

こうした泥臭い経験が、そのまま生命保険の販売に結び付いたのだ。生保セールスは担当する企業のオフィスを毎日訪ね、昼休みなどを利用してビラを配り、販売を行う。契約に結び付くのはほんのわずかで、とても地道で泥臭い仕事だ。

私が大学でやってきたことと重なった。このような仕事を通して、営業職員が仕事をよりしやすくなるような企画や商品を考えてい。こんな思いが強くなり、私は総合職を受験することに決めた。

7月某日。丸の内の本社で面接が行われた。待ちに待った場所である。東京駅から手を伸ばせば届くような距離に、目指す会社はあった。面接官が私に聞いた。「あなたはこの会社に入って何がやりたいですか？」

そこまで深く考えていなかった私はこう答えた。「営業職員の人がいつも明るくなれるような企画を発信したいです」

面接官「たとえばどんなものですか？」

私「たとえば(採用のパンフレットで見かけた)社内衛星放送を流す部署に入って、営業職員の人を笑わせられるような番組企画を考えたいです」



2011年秋のライブ

自分でもく生命保険会社で何言っただ、馬鹿野郎>と思ったが、面接官の反応は違った。ゆっくりと笑顔でうなずいている。その笑顔はとても力強いものだった。力強さを感じたとき、内定を確信した。

1週間後、丸の内の本社で晴れて内定をいただき、面接官と握手を交わした。

最上階に招かれて丸の内の風景を眺望した。そのとき私は、“二つの夢”がかなったとほくそ笑んだ。一つは丸の内内で働くこと。もう一つは、学生時代とは違った意味で人を笑顔にするような仕事ができることだ。

就活や大学卒業を機に、改めて自身の4年にわたるサークル活動を振り返った。人を笑顔にすることは大変だ。大変だからこそ、そこに喜びややりがいを見出すことができる。だからこそ、“一笑懸命”になれるのだ。

こんな私も今春から社会人となる。これからも、中大落研で培った経験をバネに、どんなに大変な仕事でも決してくじけず最後まで、一生懸命やり遂げたい。

そこに、人の笑顔が、ある限り。

